様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２２６４

研究課題名（和文）円空彫刻の全作品カタログの作成

研究課題名（英文）Catalogue raisonne of Enku sculpture

研究代表者
野村　幸弘（NOMURA, Yukihiro）

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：２０１９８６３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：江戸初期の遊行僧、円空（1632-1695年）が30年以上かけて、東北・北海道・北陸・北関東・東海・関西など、日本の広範囲にわたって制作した仏像・神像の写真撮影を行った。その写真をもとに、各制作地における円空の彫刻様式の特徴を考察し、その様式の変遷を跡付けた。そして東北・北海道に残る円空の初期作である十一面観音立像と観音菩薩坐像、北関東に残る中期の不動明王坐像、岐阜県郡上市美並町の円空ふるさと館、下呂市合掌村円空館所蔵の円空作品のカタログを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
円空の彫刻作品のカタログ作成は、できるだけ客観性の高い図版資料として写真撮影を行い、今後の円空研究の基礎資料とする点に大きな学術的意義がある。カタログ作成によって先行研究と諸説を整理し、作品を編年順に示すため、今後の円空研究の出発点とすることができる。また日本各地にある円空作品の学術的な調査・研究によって、地方文化の意義と重要性を示し、地方の文化遺産の保存とその価値の再認識へとつなげることができる。

研究成果の概要（英文）：I took photographs of Buddhist and Shinto statues produced by a wandering monk Enku (1632-1695) in the early Edo period over a wide area of Japan, including the Tohoku, Hokkaido, Hokuriku, northern Kanto, Tokai and Kansai regions over a period of more than 30 years. Based on these photographs, I examined the characteristics of Enku's sculptural style in each production area and traced the changes in the style. I compiled the catalogue of Enku's early works in Tohoku and Hokkaido, such as the Standing Eleven-faced Kannon and Seated Kannon Bosatsu, and the middle period Fudo Myoo in northern Kanto, as well as the works in the Enku Furusato Museum in Minami-cho, in Gujo and in the Gassho Village Enku Museum in Gero of Gifu Prefecture.

研究分野：西洋美術史

キーワード：円空　十一面観音像　観音菩薩像　不動明王像　修験道

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1．研究開始当初の背景

円空の彫刻作品の研究は 1950 年代後半に始まり、おもに各地域の郷土史家によって精力的な研究が進められてきた。その後、民俗宗教学の視点や日本近代彫刻との関連で円空に注目が集まり、1971 年の「円空学会」の発足と学会誌「円空研究」の発行によって研究は大きく発展した。1980 年代以降はアカデミズムの研究者が円空を日本美術史、日本彫刻史の中に位置づけ、近年、少しずつ正当な評価が行われるようになってきた。しかしながら、先行研究の積み上げがないため、円空作品の様式の特徴、変遷、制作年代、像容、そしてその生涯、宗教的背景に関して、諸説紛糾したままであり、とくにそれらの問題を究明する上で欠かせない作品の写真資料が、著作権の問題などもあり、十分そろっていない状況にある。

2．研究の目的

したがって、より客観的な円空研究を進めるためには、まず美術史研究の基本であり出発点でもある作品カタログを作成する必要がある。具体的には、各地域にある円空の彫刻作品を、①東北・北海道　②北関東　③北陸　④東海　⑤近畿の 5 つのブロックに分け、写真撮影を行う。彫刻という立体作品の研究で重要なのは、正面以外にも、側面・裏面・頭頂部・底部の写真、各部位の細部拡大写真を撮影することである。そしてその写真資料によって、様式の分析と制作年代の決定を行い、カタログの作成によって、円空研究の基礎を作ることである。

3．研究の方法

はじめに円空作品の宗教的背景を考察する。次に円空作品の写真撮影・調査を行うために、まず作品所有者の許諾を得る。実地調査では、作品は基本的には 4 方向から撮影し、表情・手・足・衣襞などの細部拡大写真を撮る。画像はそれぞれ色補正・トリミング・バック処理を行ない、作品の様式分析、および制作年の確定と像容の検討を行う。これをもとにカタログを作成してデジタル・アーカイヴとし、ネット上で公開する。実際の調査・撮影は以下のように行う。

① 東北の青森・秋田・宮城・山形の寺社で円空作品 32 点を写真撮影。北海道南部・東部の寺社で現在、確認されている円空作品 51 点を写真撮影。
② 北関東、とくに円空作品が数多く残る埼玉県の寺社の不動明王像を中心に写真撮影。
③ 北陸では、富山県の猪谷関所館と光厳寺の円空作品を写真撮影。
④ 東海は、もっとも多くの円空作品が残る地域であり、美濃・飛騨・愛知・三重の 4 つに分けて写真撮影。
⑤ 近畿では、米原の光明院と大平観音堂の円空作品を写真撮影。

4．研究成果

平成 28 年度　東北・北海道に残る円空作品について、平成 28 年 8 月 20 日から 8 月 29 日までの 10 日間にわたり調査を行った。作品の所有者の許諾を得て、撮影ができた作品は以下の 20 点である。秋田（大薗寺、観音菩薩像・愛宕神社、十一面観音像・大泉寺、観音菩薩像・本荘郷土資料館、観音菩薩像・当福寺、観音菩薩像・個人蔵、観音菩薩像・赤神神社、十一面観音像・男鹿市役所教育委員会歴史資料収蔵庫、観音菩薩像・大太鼓の館、観音菩薩

像・宗福寺、十一面観音像)、青森（西福寺、十一面観音像、地蔵菩薩像・普門院、十一面観音像・胸肩神社弁天堂、十一面観音像・正法院、観音菩薩像・元光寺、観音菩薩像・西光院、観音菩薩像・長福寺、十一面観音像)、北海道（称名寺、観音菩薩像・樽前神社、観音菩薩像)。今回の撮影による各仏像の細部写真（眉・目・鼻・口・手・指・足・衣襞）を用いて、詳細な様式分析が可能となった。とくに秋田、青森、北海道に残る十一面観音像の各細部の様式を比較すると、これまで、円空の東北・北海道の足取りについて、①津軽半島→北海道→下北半島→秋田、②下北半島→北海道→津軽半島→秋田、③北海道→下北半島→津軽半島→秋田の説に分かれていたが、様式発展の変化を辿ると、秋田→津軽半島→北海道→下北半島、というように、これら３つの説と反対であることが判明した。

平成 29 年度　東北・北海道に残る円空作品について、平成 29 年 8 月 22 日から 8 月 30 日までの 9 日間にわたり調査を行った。作品の所蔵者・所有者の許諾を得て、撮影ができた作品は以下の 13 点である。秋田（龍泉寺の十一面観音像)、青森（延寿院の観音菩薩像、福昌寺の観音菩薩像、正法院の観音菩薩像、普門院の十一面観音像)、北海道（上ノ国観音堂の十一面観音像、旧笹浪家の観音菩薩像、江差観音寺の観音菩薩像、福島町役場の観音菩薩像、広尾町禅林寺の観音菩薩像、根崎神社の聖観音立像、長万部平和祈念館の観音菩薩像、上磯神社の観音菩薩像)。秋田、龍泉寺と北海道、上ノ国観音堂の十一面観音像、さらに根崎神社の聖観音立像の詳細な細部写真（眉・目・鼻・口・手・指・足・衣襞）を今回、撮影することが出来、その様式分析の結果、従来の説とはまったく逆に、秋田→津軽半島→北海道→下北半島というように、円空の東北・北海道で辿った足取りの新しい仮説を得ることができた。また、今年度から、北関東に残る円空作品の調査を開始した。調査した場所は以下の通り。日光清滝寺（平成 29 年 4 月 14-15 日)、春日部市小淵観音院（5 月 3 日)、芝山古墳はにわ博物館（9 月 17 日)、埼玉県立歴史と民俗の博物館（10 月 15 日)、中井出世不動尊（10 月 28 日)、蓮田市文化財展示館（12 月 9 日)、甘楽町歴史民俗資料（平成 30 年 2 月 11 日)、茨城県立歴史館（3 月 10 日)。実物を調査することで、円空の北関東における新たな特徴をもった様式展開を確認することができた。

平成 30 年度　東北・北海道に残る円空作品について、平成 30 年 8 月 28 日から 9 月 3 日までの 7 日間にわたり調査を行った。作品の所蔵者・所有者の許諾を得て、撮影ができた作品は以下の 5 点である。青森（恐山菩提寺の十一面観音像、観音菩薩像、義経寺の観音菩薩像)、北海道（海神社の観音菩薩像 2 体)。義経寺の観音菩薩像は、非公開だが、円空出生地の岐阜からの調査依頼ということで、特別に撮影の許可が下りた。とくに北海道寿都町、海神社の２体の観音菩薩像の公開は、8 年に１度の機会で、その公開日である 9 月 2 日に調査の予定を入れた。今年度、下北半島むつ市恐山の菩提寺にある十一面観音像、および観音菩薩像の調査許可が下りたので、それらの詳細な細部写真（眉・目・鼻・口・手・指・足・衣襞）を撮影することが出来、その様式分析の結果、従来の説とはまったく逆に、秋田→津軽半島→北海道→下北半島という、円空の東北・北海道で辿った足取りの新しい仮説の確証を得ることができた。9 月 16 日には、第 48 回円空学会総会に参加、「東北・北海道の円空仏について」と題した研究発表を行い、その際、岐阜県下呂市萩原町の久津八幡宮と小坂妙喜堂に円空仏の撮影を行った。

令和元年度　東北・北海道に残る円空作品について、令和元年 8 月 26 日から 8 月 30 日ま

での 5 日間にわたり調査を行った。作品の所蔵者・所有者の許諾を得て、調査、撮影ができた作品は以下の 8 点である。山形、見政寺の観音菩薩像、北海道伊達市、有珠善光寺（有珠郷土館）の観音菩薩像、上ノ国町、北村地蔵庵の観音菩薩像、上ノ国町、光明寺の観音菩薩像、江差町、栢森神社の観音菩薩像、北斗市、曹溪寺の観音菩薩像、函館市館町、汐首地蔵堂の観音菩薩像、茅部郡森町、権現山内浦神社の観音菩薩像。山形、見政寺の観音菩薩像は、様式的観点から、明らかに円空の初期作ではなく、おそらく北関東で制作されたものが後に山形に移されたと考えられる。

令和 2 年度　北海道爾志郡乙部町の作品について、令和 2 年 10 月 1 日から 10 月 3 日までの 3 日間にわたり調査を行った。作品の所蔵者・所有者の許諾を得て、調査、撮影ができた作品は、乙部町、鳥山神社観音堂の観音菩薩像、龍寶寺の観音菩薩像、元和八幡宮の観音菩薩像、本誓寺の観音菩薩像、乙部町民会館の観音菩薩像、そして青森県青森市油川大浜、浄満寺の観音菩薩像の 6 点である。上記、乙部町の円空仏 5 点を調査したことによって、その様式の漸次的な変化が確認でき、北海道の道南を円空が福島町、上ノ国町、江差町へと北上し、さらに乙部町からせたな町まで赴いたことが判明した。また、円空が東北・北海道へ旅立つ直前に制作した岐阜県関市天徳町、天徳寺の釈迦如来坐像を 12 月 17 日に、そして旅から戻ったあとに制作した岐阜県揖斐郡揖斐川町、瑞巌寺の観音菩薩像を 12 月 18 日に調査し、これら 2 点のおもに顔、耳、手の細部表現に注目して、東北・北海道の円空仏の様式と整合的に関連付けることができた。これによって 1665 年から 1667 年までの円空の初期作品の制作順序が明確になったと考えられる。

令和 3 年度　名古屋市の竜泉寺で馬頭観音像ほか 2 体、および千体仏（10 月 10 日）、関市の神光寺で十一面観音像ほか 3 体（10 月 18 日）、各務原市の金山寺で十一面観音像（10 月 20 日）の撮影を行った。また関東地方では、10 月 22 日～24 日に、群馬県高崎市の延養寺で天神像、みどり市の松源寺で薬師如来像、富岡市の黒川不動堂で十一面千手観音像の調査・撮影を行った。11 月 27 日～29 日には、埼玉県越谷市の弘福院で釈迦如来像、同市の安国寺で楊柳観音菩薩坐像ほか 2 体、加須市の大聖院で不動明王像、春日部市の香林寺で不動明王像の撮影を行った。12 月 17 日～18 日には、さいたま市立博物館寄託の不動明王像ほか 5 体、久喜市の西願寺で釈迦如来立像、久喜市郷土博物館で役行者像ほか 2 体、越谷市の西福寺で不動明王像ほか 2 体の撮影を行った。北陸地方では、富山市の猪谷資料館所蔵で白山神像ほか 7 体（11 月 14 日）、同市の光厳寺で善女竜王像ほか 2 体（11 月 15 日）の調査・撮影を行った。関市の福田寺で白山神像と恵比寿像（10 月 27 日）、美濃加茂市民ミュージアムで薬師三尊像ほか 3 体（11 月 4 日）、富加町の龍福寺で地蔵菩薩像（12 月 8 日）、同市の祐泉寺で観音菩薩像（12 月 8 日）、富加町郷土資料館で観音像と地蔵菩薩像（12 月 8 日）、関市の藤谷円空堂で 17 体（2 月 27 日）、同市の円福寺で 6 体（3 月 11 日）、尾張旭市のスカイワードあさひで聖観音菩薩立像ほか 4 体（3 月 18 日）の調査・撮影を行った。以上の調査から、北関東地方の円空仏は、修験道に関係する不動明王像の作例が増えている点に注目すれば、北関東に赴く前後の美濃・尾張における不動明王像との様式のつながりが明らかになることが分かった。そこから円空が美濃から、東海道ではなく、中山道を通って北関東へ旅したことが判明した。

令和 4 年度　岐阜県、滋賀県、三重県、愛知県、群馬県、栃木県、茨城県に残る円空作品の

調査を行った。岐阜県では、美江寺観音（岐阜市・4 月 18 日）の、天喜寺（大垣市・4 月 21 日）、薬師寺（岐阜市・6 月 1 日）の薬師如来坐像の写真撮影を行った。これらはいずれも裳懸座が非常に長く引き伸ばされているという際立った特徴をもっている。裳懸座が高くなる特徴は、岐阜県郡上市美並町白山神社の 2 体（円空ふるさと館蔵）に見られ、その後、衣襞の数が少しずつ増えて行く傾向にある。とすれば、美江寺観音→薬師寺→天喜寺の順で制作された可能性が高い。白鳥神社と千虎自治会（いずれも郡上市・6 月 23 日）蔵の不動明王坐像は、三輪神社（郡上市・6 月 24 日）や 1679 年の銘がある 2 体の不動明王坐像(円空ふるさと館蔵）と様式的に非常に近く、また妙義神社（群馬県富岡市・6 月 18 日）の不動明王坐像にも似ているため、翌 1680 年に始まる円空の関東への旅が、東海道ではなく、中山道経由であったことを確証することができた。一方、輪王寺宝物館の不動明王坐像（栃木県日光市・7 月 21 日）は、羂索を握る左手の表現から、円空の関東滞在の終わりに位置づけることができる。滋賀県では、大平観音堂の十一面観音像、および光明院の不動明王立像（いずれも米原市・5 月 21 日）の写真撮影を行った。大平観音堂の十一面観音像は、頭部と胴体の幅がほぼ同じで、三輪神社の十一面観音像（郡上市・6 月 24 日）とはまったく異なる様式を示している。光明院の不動明王立像も、笠松歴史未来館蔵（6 月 9 日）や光了寺（茨城県古河市・6 月 17 日）の不動明王立像と比べると、衣服下部の襞が松毬状になっており、飛騨における作仏に近いことが分かる。三重県では、法住院（伊勢市・6 月 4 日）で円空作とみられる不動明王坐像が新たに発見され、それを真作であると鑑定し、三重県博物館で開催の「三重の円空展」（10 月 8 日～12 月 4 日）で展示された。そのほか、岐南町歴史資料館（6 月 9 日）、永宝寺（足利市・6 月 17 日）、歴史民俗資料館（海津市・6 月 24 日）、林広院（郡上市・6 月 24 日）院田薬師堂（北名古屋市・6 月 28 日）でも、円空作品の写真撮影を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 野村幸弘	４．巻 71
２．論文標題 円空の彫刻芸術（５）－関東の不動明王坐像	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告－人文科学	６．最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野村幸弘	４．巻 69
２．論文標題 円空の彫刻芸術（４）－東北・北海道の観音菩薩像	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告－人文科学	６．最初と最後の頁 73-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野村幸弘	４．巻 68
２．論文標題 円空の彫刻芸術（３）－東北・北海道の十一面観音像	５．発行年 2020年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告－人文科学	６．最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野村幸弘	４．巻 33
２．論文標題 東北・北海道における円空の旅路	５．発行年 2019年
３．雑誌名 円空研究	６．最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野村幸弘	4．巻 47511
2．論文標題 円空の東北、北海道旅路ルート新説	5．発行年 2018年
3．雑誌名 岐阜新聞	6．最初と最後の頁 10-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野村幸弘	4．巻 66
2．論文標題 円空の彫刻芸術（2）－様式の分析と編年	5．発行年 2017年
3．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告＝人文科学＝	6．最初と最後の頁 113-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 野村幸弘
2．発表標題 Enku, l’avanguardia del periodo Edo
3．学会等名 Convegno internazionale su Dogen（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 野村幸弘
2．発表標題 東北・北海道の円空仏について
3．学会等名 円空学会
4．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 おとなのための岐阜学講座編	４．発行年 2018年
２．出版社 （株）みらい	５．総ページ数 131
３．書名 リブロ岐阜学VOL.3ー岐阜の自然・文化・芸術2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2020年10月22日、さいたま市立博物館主催の「さいたま市民大学講座」で「様式から見る円空の彫刻」と題して講演を行った。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関